Ann. Rep. Asahikawa Med. Coll.
Vol.20, 01-08 (1999)

倫理的、宗教的表現について
── ウィトゲンシュタインの語れないこと語らないということ ──

岡　田　雅　勝

1、倫理的、宗教的表現の誤用

ウィトゲンシュタインの苦悩に満ち、しかもあくことなき情熱的な若き日の思索が辿りついた結論は〈価値的なもの〉の存在こそ、生を支えるものであり、それなしに生がなりたないものであった。その意味でそれは自分の生にとって支えとなるものであった。しかしそれは語り得ないものであった。語り得るものは共通した価値であり、それゆえ他人と分かち合える価値である。そういうものはないというのがウィトゲンシュタインの見解であった。彼にとって自分の生を支え、生を導く価値は語り得ないものであった。語り得るものは、彼にとつて価値ではなかった。少なくともそれは倫理的価値ではなかった。それを通常私たちは語ろうと努力して、語ろうとする傾向がある。彼は生涯語ろうとする衝動に駆り立てられたことがあった。しかしそれは虚しい努力であると何度何度も彼が反復して導いた結論であった。彼は価値が語り得ないということを身をもって実践した。そのことは彼の行為についての報告や彼自身の遺稿から伺われることである。

彼のモノローグとも言える断片には、〈神〉、〈宗教〉、〈価値的なもの〉について多くを語っている。彼はいつもモノローグをした。彼の内面は言語を越えたものとの対話にあった。私たちは彼の内面に入り込むことが出来ないが、彼のとった行為からそうした彼の内面に触れることが出来る。そこで私たちはまず彼の『論理哲学論考』以降の〈価値的なもの〉を追い、彼の〈倫理的、価値的なもの〉に関する表現について考えたい。1929年、「人間には、言語の限界へ向かって突進しようとする衝動があるのだ。たとえば、何かが存在するという驚きのことを考えてみよ。その驚きは、疑問文の形では表現出来ず、その答えもまた存在しない。私たちは何を言っても、それは全てア・プリオリにたんなる無意味でしかありえない。それにかかわず、私たちは言語の限界に向かって突進する、このような突進は、キェルケゴールもまたこれをみているのであって、これを全くよく似た言い方で逆説への突進として言い表している。言語への限界へのこのような突進こそ倫理なのである。私は人が倫理について無駄話し ── (倫理的) 認識が存在するかどうか、価値が存在するかどうか、善は定義出来るかどうか等 ── に終止符を打つこそ、本当に重要なことでだと思う。倫理学において、人はいつも事柄の本質が関係しないもの、そして関係出来ないものをものを語ろうとする試みを行うものである。人が善の定義をして何を与えようと、その表現は人が実際に考えているものに合致していると考えているのはいつも誤解である」(『倫理学講話』)。

この内容は『論考』の〈沈黙すべし〉という促しの内容を語るものであろう。ウィトゲンシュタインは基本的に上述の考えに従って、〈倫理について〉の講演を行っている。彼はG・E・ムーアの『プ

旭川医科大学医学部哲学　　e-mail: maokada@asahikawa-med.ac.jp

リンキピア・エティカ』を手引きとして倫理に関して彼のこれまでの見解の整理して述べたものである。

ウィトゲンシュタインにとって、ムーアにしたがって倫理を〈善であるものへの探究〉と言っても、あるいは（価値あるものへの、あるいは真に重要なものへの探究〉といっても、〈人生への意味への、あるいは人生の生き甲斐をもたらすものへの探究、あるいは正しい生き方への探究〉といってもいい。こうした表現から、二つのことなった意味、つまり些末な、あるいは相対的な意味と倫理的、あるいは絶対的な意味と二つの使い方に分けられる。たとえば、〈これはよい家である〉と言えば、その意味はその家が特定の決められた目的に役立っているということであり、〈よい〉は、この目的が予め決まっている限りにおいてのみ意味をもつ。

相対的な意味の〈よい〉はある特定の予め決まっている基準に達していることを意味している。しかし相対的な価値は倫理的価値判断とはならない。たとえば、「私が車の運転ができ、他の人たちが私が車を運転しているのをみて、〈車の運転が下手だ〉と言ったとき、私が〈そう、下手だだよ、しかしもっと上手になろうと思わないよ〉と答えるとき、人々は〈それなら仕方がない。いいさ〉と言うであろう。しかし私が誰かに途方もない嘘を吐いたとき、その人が私のところにきて、〈お前のやっていることは犬畜生同様だ〉と言ったとき、〈そう、私のやっていることは悪いよ。でもよくしようと思わない〉と答えると、その人は〈それならいいさ〉と言わないであろう。〈もっとよくすべきと思うべきだ〉とその人は言うであろう。

ウィトゲンシュタインは前者を相対的価値判断として、後者を絶対的価値判断だとする。相対的価値判断は事実の記述になる。それは見かけ上価値判断でない形に言い換えることが出来る。たとえば、〈この人はよい走者だ〉は〈彼は何マイル何分で走る〉と言い換えることが出来る。価値判断は事実の記述文にすぎない。それに対して倫理的判断、絶対的価値判断は事実の記述に帰せることが出来ない。全ての相対的価値判断はいま述べたように事実に還元出来る文であり、それゆえ、それは科学的命題である。したがって、科学的命題は全て記述に関する文であり、それは相対的価値と同一の次元にある。この事実の記述には倫理的命題を、絶対的価値判断を何も含まない。たとえば殺人についての記述は、〈ものの出来事、たとえば落石などと同じ次元にあることとなる。その記述によって怒りとか、悲しみの情がたとえ起こったとしても、それは死という事実を記述したものにすぎない。この二つのことは、厳密に区別されなければならない。この二つの価値判断を混同しはならないとウィトゲンシュタインが言うのである。その意味において私たちは倫理的、宗教的表現を事実に関する記述として表現してはならない。この誤用がなされていることをウィトゲンシュタインは主張する。

ウィトゲンシュタインはかって〈倫理学〉という書物を書こうとしていたことがあったかどうかという問題は問わないとしても、もしそのような書物が書けるとしたら。一体どういうことであろか。彼はとってそのような書物を書こうとしたが書けなかった。事実は記述出来るが、倫理的命題、絶対的命題はそれを拒むのであった。人々は倫理問題を書こうとするが、書くという企ては虚しい企てであること知るべきである。これは他人に伝達されるようことではなく、個人の内面で実践するしかないものである。

偉大なる宗教家たちは、決してペンをとろうとしてしなかった。たとえば、イエス、釈迦がそうだった。ただ弟子たちとされている人たちがその姿を追い、彼の言動を言葉化したのだ。しかしイエス、釈迦は彼らが悟り得た事柄が言葉化されないということを知っていたのだった。彼らは自分の体験を語らず、沈黙に身を委ねたのであった。沈黙のただなかで一人にただ生の何かを指し示した。それを弟子たちが何とか書き留めてこのことを伝達しようとした。それが他人に伝わったのかどうかはまた

語り得ない。ウィトゲンシュタインが言おうとしていたことはそうした原体験である。私たちはそれが他人に伝達され得ないことをウィトゲンシュタインに従って述べておきたい。

2、倫理的なもの ―― 絶対的価値について

ウィトゲンシュタインに従ってば、倫理の主題は本質的に崇高なものであり、他のあらゆる主題を超えることができるものであり、超自然的である。私たちの言葉は事実を表現するだけのものであるから、そうした主題を語り得るものではない。それゆえ、それらについて語ることは無意味であるということである。たとえば、絶対的価値とされているものとして、ウィトゲンシュタインに従えば、〈唯一の絶対に正しい道〉、〈絶対的善〉である。そして前者の意味は、〈それは誰もがそれを見ると論理的必然性をもって行わなければならないか、行わないことを恥じる道〉ということである。後者は、〈もしそれが記述可能であれば、誰もが必然的に生み出す、あるいは生み出さないことに対し罪悪感を覚えると考えられるような状態〉ということである。

しかしこうした状態はどだい幻想であり、どんな状態であっても絶対的な善という強制力は働かない。それにもかかわず、私たちは〈絶対的善〉、〈絶対的価値〉等をあずかりたいという誘惑に駆り立てられる。一体〈絶対的善〉等はどんなことを言いあらわそうとしているか。〈絶対的善〉等によって、何を考えているのであろうか、何を表現しようとしているか。そのとき、ウィトゲンシュタインに従えば、〈きまって快楽を感じたある典型的状況を想い出そうとする〉。たとえば、〈晴れ渡った夏の日の散歩〉等とか、あるいはそれと類似な状況における体験である。この体験において、〈私は世界の存在に驚きの念をもつ〉ということ、〈何かが存在するととはどんなに異常なことであるか〉〈この世界が存在するとはどんなに異常なことか〉という言葉で表現されるような体験をする。あるいは〈絶対に安全であると感じる経験〉ということで表される体験で、〈私は安全であり、何が起ころうとも何ものも私を傷つけることはできない〉という精神状態である。

私たちはこうした体験をもつが、この体験を言語的表現を与えても無意味だということをウィトゲンシュタインは主張する。〈私は世界の存在に驚く〉というとき、この言葉を誤用しているのである。通常〈あるものがしかじかかくかくであるということに私は驚く〉というのは明瞭な意味をもつ。というのは、それは〈しかじかではないと私が考えることが出来る何かしかじかのことに私が驚く〉ことを意味しているからである。たとえば、〈私はこの犬の大きさに驚く〉というのは、〈私がそれとは別の犬、つまり大きさが、普通で、驚かない犬について考えることができる〉からなのである。

また〈ある家を見るさい、その家を長い間見ておらず、その家がなくなってしまっていると思われているのに、実際にはまだその家があったとき、驚く〉。つまり〈かくかくものが、しかじかであるのに驚く〉というのは、〈しかじかではない〉と想像できるときの意味のもつ。それに対して〈世界の存在に驚く〉というのは無意味となる。なぜなら、〈世界の非存在〉を決して考えることが出来ないからである。また〈絶対に安全であるという経験〉はどんな経験であるのか。それは自分の部屋に居て、バスにひき殺されることがありえないとき、私は安全である。安全であるとは、本来的にあることが私に起こることは物理的に不可能であることであり、したがって何かが起ころとも私は安全であるというのは無意味である。この〈安全〉という言葉も、今述べたように言葉の誤用である。

このことを例として、ウィトゲンシュタインはすべての倫理的、宗教的表現には一貫して私たちの言語についてのある種の特別な誤用があると述べる。この誤用は私たちが起こしている過ちで、私たちはそれとは知らずに言語を使っている。したがって、私たちは言語をもつ構造を深く認識しなければならない。

3、倫理的、宗教的表現と直喩

ウィトゲンシュタインは全ての倫理的、宗教的表現は全て直喩を使っていると述べている。まったくその通りである。私たちはそのことを知る必要がある。倫理的に〈正しい〉という言葉を使うとき、それを何か似たことの意味に使っている。たとえば、〈この方はいい人である〉というとき、〈この方はよいフットボールの選手だ〉という意味にとって言っているように思われる。この二つの文には何か類似がある。〈この人の一生は価値あるものであった〉というとき、〈ある値打ちのある宝石について語る〉ことと何らかの類比で語られている。宗教的な言葉は、とくにこうした意味で直喩、あるいは諷喩で語られる。

たとえば、〈神は万事を見そなわす〉、〈神の祈りのとき、私たちの言動は全て、私たちがその恩寵を得ようとしたり、あるいはその他の諸々のことをする、偉大な力をもった人間として神を描き出す、壮大で念の入った諷喩の一部であるように思われる〉。

この諷喩はさきほどあげた経験を記述したものである。一つには、〈神のこの世の創造〉というとき、それについて反対は考えられないこと、二つには、〈絶対に安全で〉というとき、〈私たちは神の御手にあるとき、安全と感じるということである。三つには、〈罪悪感をもつ〉という経験である。〈神は私たちの行為を認め得ず〉という言葉で表現される。

このように、私たちはたえず倫理的、宗教的言語では直喩を使っている。直喩でしか表され得ないということである。ここに倫理的、宗教的表現はノーマルな表現では表現され得ないということを知る。なぜなら、ある事実を直喩で記述できるのであれば、直喩をやめて、事実を記述出来なければならない。ところが、いま私たちが問題にしていることがらを直喩をやめて、その背後にある事実を述べようとすると、そのような事実がないということに気づく。それで最初は直喩と見えたそのものがいまや無意味にすぎないように思われてくる。ここで示した先ほどの三つの経験が何か内在的で、絶対的な価値をもつように見えてくる。

しかしそれらは経験であるとして上げたのであるから、それらは間違いなく経験である。それらはそのとき、その場所で起こり、経験された事実である。それらはしたがって記述可能である。それゆえそれらに絶対的価値があるというのは間違いであり、無意味である。そして「ある経験、ある事実に自然的価値があると考えるとすれば、それは背理である」という言い方によって事実と価値が違っているということが出来る。

しかしこの背理に対処する方法があるのではないかという問題がここで出てる。たとえば、〈世界の存在に驚く〉経験をあげると、私たちは日常生活で奇跡と呼ぶものを知っている。たとえば、誰かに突然ライオンの頭が生じ、そして吠えだしたという場合を取り上げてみよう。この例は私に想像できる限りの異常な出来事である。しかしこれを科学的に調べて貰ったなら、この奇跡はどうなるであろうか。科学的に捉えれば、もう奇跡というのは消失しているのではないか。── 奇跡という言葉で私たちが言おうとすることがたんに、ある事実は科学によってまだ説明されていないということ、そしてこれはさらにこの事実を他の事実と一緒にして科学的体系で系統的にまとめることが出来なかったと意味である。科学的な事実の見方はそれを奇跡として見る見方ではない。どんな事実を想像しても、それはそれ自体では奇跡という言葉の絶対的意味で奇跡でない。というのは、私たちは〈奇跡〉という言葉を相対的および絶対的な意味で使っていることが分かるからである。そして〈世界の存在に驚く〉という経験を、それは〈世界を奇跡〉としてみる経験という言い方で表すことにする。

しかしそうだすれば、あるときにはこの奇跡に気が付き、他のときには、気づかないということは何を意味するか。というのは、奇跡的なものの表現を言語による表現から言語による表現へと移し変

え、それによって私が語ってきたことは自分の表現したいことを表現できないといこと、また私たちが絶対的に神秘的なことについて語ることはすべて無意味であるということである。つまり倫理的、宗教的表現で私たちは正しい論理的分析を見いだすことが出来ないということである。

つまりいかなる記述も絶対的価値の記述には役立たない。そればかりではなく、誰かが提案できる有意義な記述があるとしたら、それをも否定して拒否するということである。ここで強調したことは、なぜ倫理的、宗教的表現が無意味なのかということことは、その正しい表現を私が発見していないからではなく、その無意味さが倫理的、宗教的な表現の本質であるからなのである。もしそれらの表現を使って私がしたいことは、ただ世界を超えていくこと、とりもなおさず日常言語を超えていくということである。

したがって、〈倫理とか宗教について書き、あるいは語ろうとした全ての人の傾向は言語の限界に逆らって進むということである〉。なぜ倫理的、宗教的表現は語っても意味がないのか。それはそれが全く日常言語と異なる論理的構造をもつということにある。科学は日常言語と同じ次元で語られるから、論理構造も同次元であり、日常言語と同次元で語ることが出来る。〈倫理学が人生の究極の意味、絶対的な善、絶対的に価値あるものについて何かを語ろうとする欲求から生じたものである限り、それは科学ではない〉。それゆえ、倫理的、宗教的表現は日常の論理では語り得ない。ウィトゲンシュタインはこうして価値のもつ論理的構造と事実のもつ論理構造が違うことに努力したのであつた。価値といっても、あくまでも絶対的な価値であって、いわゆる相対的価値についてではない。相対的価値に事実に還元される価値であって、それは事実に関する記述である。それに対して絶対的価値にいかなる仕方においも、事実に還元され得ないものであり、それゆえ、記述され難いものである。私たちの言語をこのように二つに分けたところにウィトゲンシュタインの鋭い分析がある。

4、倫理的、宗教的命題は存在しない

ウィトゲンシュタインによると、結局倫理的、宗教的命題は存在しないということである。『論考』で「倫理の命題は存在しない」(6.42) と述べている。この意味は、「この世界には価値が存在しない」「価値ある価値が存在しないならば、それはすべての生起やそのような存在（So Sein）の外になければならない。なぜなら、すべての生起やそのような存在は偶然であるからである。それらを偶然でなくするものは、世界のなかにあるとが出来ない。世界のなかにあるとすれば、これもまた偶然であろうからである。それは世界の外になければならない」(6.41) ということである。ここにも価値が扱われている。価値は存在しえない。この存在ということで、事実であるということと同じ意味に用いている。価値は事実についての記述ではあり得ないということを言っているのである。したがって、「倫理学が表明されえないことが明らかである」(6.421) ということである。それゆえ、「倫理学は超越的である」(6.421)。倫理的、宗教的価値語り得ない得ないのは、倫理的、宗教的な表現が記述的な表現ではなく、本来超越的な表現であるからである。

それにもかかわらず倫理的、宗教的価値について語ることは、記述可能な命題と同じ次元で語ることは無意味であるけれども、記述可能な命題ではないけれども、しかし善や価値に語ることは何かを意味する。ここにウィトゲンシュタインが価値について語り得ないことを表明しながら、いつも何か語った、あるいは何かを語ろうとした意味がある。彼はつぎのように書いている。「語ることはいかなる意味においても私たちの知識を増すものでない。しかしそれは人間の精神に潜む傾向を記した文書であり、私は個人的にはこの傾向に深く敬意を払わざるを得ません、また生涯にわたって私はそれをあざけるようなことはしない」と語っている。

倫理的、宗教的な命題について語ってきた長い人類の歴史があるのであって、人類はその間この倫理的、宗教的な命題について語ろうとした苦闘の歴史があるのである。人類はこの倫理的、宗教的な命題を語ろうとしたのであった。だが、それは語り得なかった歴史でもあったし、語ったことはどれも虚しい努力であったことを知らなければならない。それにしても語ろうとする努力は、決してあざけり笑うということではなく、人間の精神に潜む努力であり、その努力に敬意を払わざるを得ないというのがウィトゲンシュタインの結論であった。

ウィトゲンシュタインが導いた結論は、なぜ科学的言語だけが記述可能な文であると考えたのか。なぜ倫理的、宗教的な命題が記述可能な文ではないと考えたのかは以上の点から考えられる。その他に無論記述不可能な文として、他に美学の命題もあげられる(「倫理学と美学は一つである」(6.421))。また「幸福の人の世界は不幸な人とは別の世界である」(6.43)、「永遠の生」(6.4312)、「人間の魂が時間的に不死である」ことなどは、「時間空間のなかでの生の解決は時間空間の外にある」(6.4312)を指しているので、これらの事柄も記述不可能な命題である。

このように、記述可能な文と記述不可能な文を明瞭に述べることにウィトゲンシュタインの果たした役割がある。この区別こそウィトゲンシュタインの『論考』が書かれた意味があると言えよう。言語批判の意味があるのである。「哲学の本来の正しい方法は、語られること、したがって自然科学の命題、したがって哲学とは何の関係もないことこれ以外の何も語らないということである」(6.53)ということである。

と言って、記述可能なことが全て人生の出来事なのでなく、人生には記述不可能なことが多い。たとえ記述可能なことが全て解決されても人生の問題は依然としてまったく手が付けられていないのである(6.52)。人生のこの不可思議さを認なければならない。しかしこの神秘的なことは世界が如何にあるかということではなく、世界があるということなのである。このあるということに対して、私たち人間が答えようとして、長い長い歴史がある。この問題に対して事実問題として答えられ得ない。信念の問題になり得るのである。

しかし信念の問題は決して記述可能なものではない。事実問題とは異なるのである。というのは、この問題は個々人の心にある問題であり、誰にとっても明白な事実問題として示されない。これはまさしく美的な問題と同じであって、美的な問題は個々人の心のなかにあって、それを共有することはあってもそれを事実問題と同じに取り扱うことが不可能である。倫理的、宗教的問題はこうした事実問題とは全く違った問題であるとウィトゲンシュタインが繰り返し主張するのである。

5、神秘的なことについて語ることは無意味である。

言語批判し、何が語られるとであるかを何が語られられないことであるかを画定することが論理実証主義者の役割であった。ウィトゲンシュタインもカントの理性批判を意識し、徹底した批判をした。しかし批判は理性という人間のもつ最高の良識の批判ではなかった。人間の言語能力の批判であった。したがって、ウィトゲンシュタインの生み出した時代の人々の関心は、理性ということでなく言語に向けられていた。言語への関心が人々の関心を呼んでいた。そして科学がどうように言語に関わっていくかという関心が論理実証主義者の関心であった。

この関心に最も厳密な意味で、関心を示したのがウィトゲンシュタインであった。彼はカントの厳密な理性批判を言語批判に代わって論じた。哲学が何もかも論ずることが不可能だというのが、第一の基盤であった。哲学が一体何を論ずるのが相応しいかという問いに挑戦したのだった。思考の正しい在り方を吟味し、それでもって真理を探しだそうとしたのであった。真理は形而上学的に追求され

ないということが彼の出発であった。したがって、明瞭に語りうるものを語るということが彼の取った方法であった。このことが思考の限界を定めることでもあった。

そうだとすると事実について記述すること以外にないと結論が出てしまうのであった。真理論は論理の枠組みのなかで説かれ、したがって真理関数論的に導かれることとなる。こうした事以外に、つまり論理の枠組みのなかに真理を論ずることだけを真理だとすることによって、真理はこれまで以上に狭い枠を課せられる。哲学は永遠の真理を探究する学問という哲学の任務はなくなってしまい、哲学の問題は消滅してしまう。「哲学の正しい方法は、本来語られ得ること、したがって、自然科学の命題以外に何も語らないこと、したがって、哲学と何の関係がないということである。そして他の人が形而上学的なことを語ろうとするとき、いつも彼が自分の命題のある記号に何の意味も与えていないことを指摘するということである」(6.53)。そしてウィトゲンシュタインは「この方法が唯一厳密に正しい方法である」(同)と述べている。つまり哲学は語り得ることを明瞭に語り、語り得ないことについて沈黙することである。

哲学の役割は終わったということである。『論考』の最も主張したかった点は、倫理的な問題だったというウィトゲンシュタインのいま述べたことである。これを言葉をかえて言えば、哲学の問題であって、ウィトゲンシュタインは哲学の問題から倫理問題をとり、さらには宗教の問題も美学の問題も除くのであった。したがって、カントの理性批判は宗教を除くすべての領域にわたり、理性批判をした。とりわけ実践理性批判の問題はカントにとって理性批判の最も重要な問題であった。彼はその問題を論ずることができないという結論に導いた。それは事実の問題と価値の問題が根本的に違っているということから導いたのであった。

事実問題は科学的に扱い得る。したがって、答えが得られるという考えである。そして真理はまさにこの事実に適用されうるという考えである。真理論はこの科学の枠内で適用されるのであって、その枠を拡げてならないという考えである。そうすると哲学の取り扱う範囲は、その限りの真理論であり、形而上学的な事柄は一切取り扱わないということになる。そうすると哲学が自ら独自の領域をもてないことを意味する。その意味で哲学的問題は自然と消滅してしまう。そうだとするなら、従来まで哲学の問題とされた事柄は何等哲学的問題になり得ないことを意味するであろう。

その意味で、初期ウィトゲンシュタインの哲学問題は解決されたと考えたい。しかしそうは言っても従来から論じられた哲学問題は解決されたわけではない。ただ事実問題しか論じないこと、記述可能な命題しか取り扱わないことと言って、哲学問題からそれらを取り扱い得ないと述べたにすぎない。ここで考えてみなけばならないのはウィトゲンシュタインの区分は正しいとしても哲学の問題は果たして論じ得られないかという問題である。

有意味なことを語ることを哲学な問題としたが、有意味なこととは全て事実問題である。とすると倫理的、宗教的な問題は問題は語り得ない問題であり、語ろうとすると無意味な問題となる。このことをウィトゲンシュタインを悩ました問題であった。倫理的、宗教的な問題は、ウィトゲンシュタインにとっても極めて重要な問題であった。しかし有意味的に語り得ないということがウィトゲンシュタインのネックとなった。重要であるのにもかかわらず、語り得ないことに問題点がある。それが他の論理実証主義者とことなる点である。

6、語り得ないことについて沈黙しなければならない

他の論理実証主義者は形而上学的命題を無意味なものと論じ、それゆえ、形而上学的命題の排除にあたった。その形而上学的命題を無意味として排除する点はウィトゲンシュタインも同じであった。

両者とも形而上学を無意味としたのであった。しかし論理実証主義者は形而上学は経験の問題には関わりがなく、それゆえ哲学の問題にならなく、端的にそれを扱うことが誤りであるとした。それに対して、ウィトゲンシュタインは同じく経験に関わりを持ち得ず、それゆえ、哲学は経験の問題に限定すべきであるが、価値の問題は経験問題ではあり得ない。つまり形而上学的問題は言語問題を超えている。それゆえ、語る領域を超えてある。その領域について私たちは語るすべを知らない。それにもかかわず、その領域は極めて重要である。この問題はウィトゲンシュタインがいつも苦闘していた問題であって、人々が科学に絶対的な信頼をおき、科学を信頼していたのであったが、ウィトゲンシュタインは科学で解決さる問題の本質を見抜いていたのであった。

科学が解決される問題は事実の問題にすぎない、科学の解決されることは、論理の限界内に限られるということを彼はしっかりと洞察したのであった。論理の限界にある事柄は言葉化されえないということを彼は認めざるを得なかった。したがって、彼の初期の仕事である『論考』は語りを得ないことについて語らないということであつて、倫理的、宗教的な問題を語らないことに力を尽くしたという彼の意図がはっきりと捉えられるのである。倫理的、宗教的な問題は論理の限界を超えてあるもので、けっして経験的な問題、事実に還元できない問題であることを彼はどうしても言わなけばならなかった。無論疑似命題は別である。つまり相対的価値についてはどれも事実問題に還元されるのであり、それは真に価値問題として取り扱えないということである。つまりここで世界を言語世界と超言語世界に分けて、言語世界について語ったがウィトゲンシュタインの『論考』であった。

そして語り得ない世界に、つまり超言語世界に倫理的、宗教的問題をみたのであった。この問題は彼にとって大きな問題であった。しかし如何に考えても語り得ないという結論が彼の結論であった。彼は言語の問題に、論理実証主義者とは別なアプローチをしていった。彼らの関心が科学言語の分析に向かったとき、ウィトゲンシュタインの関心は言語ゲームに向かっていった。言語を初期の科学言語として、捉えるのではなく、ゲームとして捉える方向に向かった。

だが、彼の関心は依然として「美学、心理学、宗教的信念」にあった。つまり何度も心の内部の問題に答えようとしたのであった。そのことは『美学、心理学、宗教的信念についての講義と談話』で表されていることからも明らかである。また彼はフレーザーの『金枝編』についてフレーザーの宗教観について研究している。それら著述で彼は彼が語り得なかった心や価値の問題について触れているが、彼の結論は初期の『論考』で得た「語り得ないことについて沈黙すべきである」という結論を守り通したのであった。

ウィトゲンシュタインが示したことは、価値の問題は語り得ないという結論であって、このことを首尾一貫して彼の哲学で主張したのであった。彼の哲学が言語批判であると言われる意味は、言語の見解を定めたことがあげられる。この限界を最も厳密に彼は引いたと言える。

私たちはこの戒めを心する必要がある。私たちはともすれば倫理的、宗教的表現を語り得ると考えがちであるが、ウィトゲンシュタインのなした言語批判は、それを語り得ないと言うことであって、そのことを語ろうした。その語り方はむしろ逆説的に消極的な語り方を通して語ったのであった。